

平成 30 年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

区分	普及	題名	ぶどう「シャインマスカット」の短梢栽培における適正着果量		
[要約] ぶどう「シャインマスカット」の雨よけ被覆による短梢栽培では、主枝 1m あたりの新梢本数を 8 本程度、1 新梢あたりの着房数を 0.8 房程度とすることで、糖度 17 度以上、10a あたり 1.6t 程度の収量を確保できる。					
キーワード	シャインマスカット	雨よけ栽培	短梢栽培	技術部果樹研究室	

1 背景とねらい

ぶどう「シャインマスカット」は良食味の大粒種で、ジベレリン処理により無核となり、皮ごと食べることができるため全国的に生産量が増加し、消費者の認知度も高くなっている。「シャインマスカット」は短梢せん定に適し（参考資料・文献（3））、省力的な栽培が可能であることから、さらに生産が拡大することが期待されている。

本研究では、今後の高品質果実の安定生産拡大に向け、本県の「シャインマスカット」の短梢栽培における適正着果量を解明する。

2 成果の内容

- (1) 主枝 1m あたりの新梢本数 5 本では収量が低く、11 本では収量が多いが糖度の上昇が遅く、酸度も高い傾向となるため、主枝 1m あたりの新梢本数は 8 本程度が適する（表 1、図 1）。
- (2) 1 新梢あたりの着房数が多いほど収量は増加するが、1.0 房では糖度の上昇が遅れる傾向となるため、1 新梢あたりの着房数は 0.8 房程度が適する（表 2、図 2）。
- (3) 以上より、主枝 1m あたりの新梢本数を 8 本程度、1 新梢あたりの着房数を 0.8 房程度とすることで、糖度 17 度以上、10a あたり 1.6t 程度の収量を確保できる。

3 成果活用上の留意事項

- (1) 本試験は、短梢栽培用平棚において H 型整枝とし、新梢は棚下に下垂させた。また、発芽後から収穫終了まで雨よけトンネル被覆を行い、7 月中旬に被袋（白色袋）した。
- (2) 果房は、1 房 45 粒、房重 500g 程度とし、収穫時の糖度 17° 以上を基準とする。
- (3) 着果過多は、熟期が遅れ発芽不良等の凍寒害が発生する恐れがあるので避ける。

4 成果の活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等

- ア 適用地帯 県中南部（「シャインマスカット」栽培可能地域）
- イ 対象者等 ぶどう生産者及び栽培指導者

(2) 期待する活用効果

- ア 「シャインマスカット」の安定生産が可能となり、高品質果実生産につながる。
- イ 既存の短梢栽培用平棚を利用した栽培面積 1.0ha（5 年後）

5 当該事項に係る試験研究課題

- (H30-17) 生食用ぶどう品種の育成・選抜と栽培技術の確立
- (3000) 安定・省力栽培技術の確立[H30～34/県単]

6 研究担当者

大野浩、西田絵梨香、佐々木真人

7 参考資料・文献

- (1) 平成 18 年度試験研究成果「ぶどう「シャインマスカット」の特性評価」（指導）
- (2) 平成 21 年度試験研究成果「ぶどう品種「シャインマスカット」の花穂整形、ジベレリン処理、摘粒の方法」（普及）
- (3) 平成 24 年度試験研究成果「ぶどう白色大粒品種「シャインマスカット」は短梢せん定に適する」（普及）
- (4) 平成 26～29 年度 岩手県農業研究センター果樹試験成績書（一部未定稿）

8 試験成績の概要（具体的なデータ）

表1 主枝1mあたりの新梢本数の違いが果実品質等に及ぼす影響（2014～2017年の平均±標準偏差）

新梢本数	LAI (指数)	房重 (g)	粒重 (g)	糖度 (°Brix)	酸度 (g/100ml)	果皮色 (CC指数)	収量 (kg/10a)	登熟率 (%)
5	0.9±0.1	486±46	11.4±1.2	17.9±1.1	0.37±0.04	3.4±0.4	1,106±269	90±4
8	1.5±0.1	528±53	12.9±1.7	17.8±1.3	0.37±0.06	3.1±0.4	1,916±164	91±13
11	2.0±0.3	455±59	11.3±0.8	16.9±1.2	0.47±0.06	2.9±0.3	2,316±235	96±5

注) 試験樹の概要：2008年定植、短梢平棚、H型整枝、植栽距離4m×8m。1新梢あたり葉枚数：20～25枚。

収穫期：9月下旬。着房数は0.8房/1新梢とした。

LAI：平成26年度岩手県農業研究センター果樹試験成績書より、(葉面積)y=23.1647x(新梢長)を用いて計算した。

果皮色：山梨県作成シャインマスカット用カラーチャート(1～5)を使用した。

登熟率：各試験区の新梢について休眠期に調査した。調査果数：各区10果。

表2 1新梢あたりの着房数の違いが果実品質等に及ぼす影響（2014～2018年(2017年除く)の平均±標準偏差）

着房数 (房/1新梢)	房重 (g)	粒重 (g)	糖度 (°Brix)	酸度 (g/100ml)	果皮色 (CC指数)	収量 (kg/10a)	登熟率 (%)
0.6	548±38	12.7±0.6	17.7±1.2	0.34±0.08	3.0±0.3	1,414±291	93±2
0.8	556±76	12.6±1.3	17.3±0.9	0.36±0.11	2.8±0.2	1,887±198	91±6
1.0	577±31	12.7±1.1	17.0±0.8	0.39±0.11	2.6±0.2	2,357±209	92±4

注) 試験樹の概要等は表1に同じ。主枝1mあたりの新梢本数は8本とした。

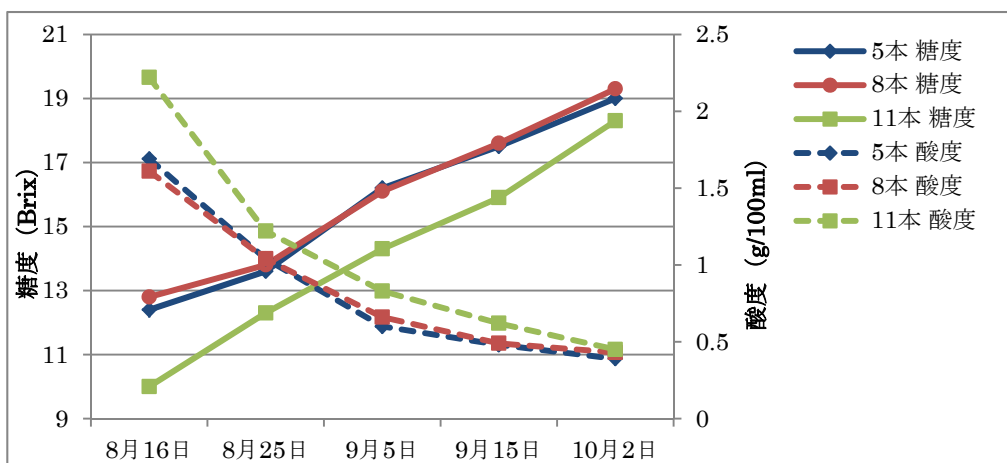


図1 主枝1mあたりの新梢本数の違いが糖度及び酸度に及ぼす影響（2017年）

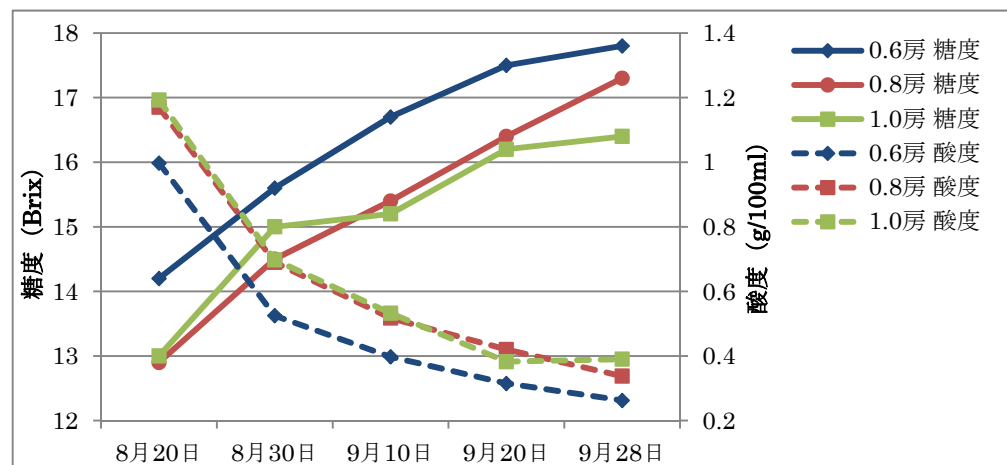


図2 1新梢あたりの着房数の違いが糖度及び酸度に及ぼす影響（2018年）